

がん診療レジデントマニュアル 第 6 版

国立がん研究センター内科レジデント 編

このたび、『がん診療レジデントマニュアル 第 6 版』に対する書評を書くようにご依頼をいただいた。おそらく、私は実はがん診療レジデントマニュアルの第 1 版の著者の一人であるので、先輩として後輩たちの作った第 6 版を厳しく評価せよ（笑）ということであろうと思われるので、お引き受けした。

世の中には、たくさんのがんの本が出版され、どれを選んで良いのか、迷う先生方も多いのではないだろうか？ 最近は随分減ってきたが、私がマニュアル作りに携わったころには、がんのテキスト本でも、著者の私見ばかりで、しっかりとしたエビデンスの記載のないものがたくさんあった。やはり記載された文書には、その考え、解説に至ったエビデンスの出典がしっかり記載されたテキスト本を選ぶべきである。そういう点から、本書を読むと、まさにその通りで事細かに、適切なエビデンスが選ばれており、著者の記載が適切であることが保証されている訳である。われわれが、抗がん剤という毒性の強い薬を患者に用いるときに、EBM の裏付けのない治療を施行することは絶対に避けねばならないが、本書を選択すればその心配はほぼないものと思われる。しかも、そのエビデンスも重要度が★によって判りやすく格付けがなされ、その推奨度が一目でわかるようになっている。

さらに本書は、治療のみならず、疫学から必要な検査、病理所見から治療成績の結果、実際の投与量までが、簡潔明瞭にまとめられている。したがって、がん診療を始められたばかりの研修医やレジデントの先生は、これを一冊持ち歩くだけで、患者に必要な検査の

オーダーから、確定診断をし、治療方針を立て、必要な化学療法を選択することが可能となり、大変有意義な書であると思われる。また、それだけの重要な EBM が記載してある割には、レジデントが中心にまとめているために、難解な事項をわかりやすく、かみ砕いて平易な文書で記載しており、医師のみならず、看護師や薬剤師などの medical staff や、学生にでもわかりやすい本となっている。またほとんどの各種がんを網羅しており、さまざまながん腫を診なくてはいけない腫瘍内科にとって大変有用であり、セカンドオピニオンをするときに、自身の専門外の腫瘍のエビデンスの確認用としても最適な本であることは間違いない。指導医クラスの医師にとっても、日々忙しく、なかなか新しい論文を読めないような方には、エビデンスブックとして利用いただくのもよろしいかと思われる。

OB であるがゆえに辛辣な批評をせねばならないところであろうが、残念ながら文句のつけ所はあまりない。願わくば、学生や貧乏なレジデントのために価格が下がれば言うことはないのではと思われるが、まさにがんと戦うすべての仲間のための必携の書といえる。

北大病院診療教授・化学療法部部長・
腫瘍センター副センター長 小松嘉人

B6 変型・頁 528 2013 年

定価：本体 4,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01842-5] 医学書院刊